NPO法人 ぱんぷきんふれあい会

事務局　菅野江里子

吉野町復興公営住宅前にある地域の交流スペース on the corner（オンザコーナー）

菅野さん）　現在、私達の主な活動としては高齢者対象に慰問、ふまねっと教室、個人支援、アクティブシニアの人材発掘育成を行っています。

元々活動の始まりになったのは、ぱんぷきん介護センターがアクティブシニアの方々に活躍してもらう場を作るというテーマで行っていた事業があり、ボランティアとして登録してもらった元気なシニアの方に施設を訪問し慰問活動をしてもらうというものでした。

それを「ぱんぷきんふれあい会」という団体として立ち上げました。その時はまだ任意団体だったんですが、これからもっと本腰を入れてやっていくには法人格の有無で周りの方の印象や活動しやすさが違ってくると思い、NPO法人を取得しました。もうすぐ取得してから二年になりますね。

私自身、石巻出身でそれまで石巻市内の病院で開業時から医療事務として働いていたんですが、多くの方と同じように震災で仕事がなくなり、何かしようかなと思っていたところにたまたまこの仕事と出合い、前職ともまったく関連のない業界ではなかったのでぱんぷきんへ入社したんです。

任期が三月までと一年の期限付きだったんですが、あれよあれよという間に仕事の幅が広がり、そのまま今も続けさせていただいています（笑）

立ち上げ当時は、私の他に、代表の渡邊、ボランティアとして登録してくれたアクティブシニアの方々数名と少数メンバーからのスタートで、できることも限られていたため、始めはほとんどが慰問活動でしたね。

高齢者の方々と歌ったり踊ったりと楽しんで参加してもらえるようなことを中心に、民謡やフランダンスの披露、縫い物の講習会を開いたりなどしていましたね。ただ当初の計画では、他に、ふまねっと教室や個人支援も想定していたので慰問活動を続けながら、それらの活動を支えてくれる、ふまねっと運動の指導者（ふまねっとサポーター）や個人支援のボランティアさんをしてくれる方などのアクティブシニアの人材発掘と養成も同時に行ってました。特にふまねっとサポーターを増やしていくことに力を入れていて今現在では、蛇田地区にサポーターとして活動している方が四、五名いらっしゃいます。

「ふまねっと」というのは、元々北海道教育大学釧路校の北澤一利教授が考えた、高齢者の歩行機能と認知機能の改善効果が期待できるものなんですね。これはNPO法人になる前、月に二回ほど蛇田地区で始めました。黙々と体の機能を向上させるためだけに体を動かすんじゃなくて、運動を通して地域との繋がりや絆を深めれるんですよ。誰かが失敗すると、思わず会場が盛り上がり、拍手が起きたり、声援が寄せられ、にぎやかに、なごやかな雰囲気が出来て。

ふまねっと運動を普及させるというよりは、ふまねっと運動を通じて地域交流を促したいという思いもあったし、様々な活動できる場もあったので鹿妻でも翌年から始めたんです。それこそ最初は五、六人、多くても七人だったんですがその年の八月あたりから口コミが広がり、今では多い時で二十人と参加者も増えています。

そして、吉野町復興住宅の前にあるon the corner（オンザコーナー）という交流スペースでも同年十二月に始めたばっかりなんですが、すでに鹿妻にまけないほど参加者で賑わっているんですよ。皆さん、楽しみにされているようでそんな遠くないと言って、冬でも渡波から自転車で来たり歩いて来る強者もいらっしゃいます。（笑）

また個人支援に関して言えば、実施しているものの正直苦戦してます。

例えば当初、想定される困りごととして日常の話し相手や買い物の付き添いなどイメージしていたのですが「お困りごとを解決します」というざっくりとした触れ込みだったので頼む方も何を頼んでいいの分からないというお声をいただいたんですね（笑）

やっぱりお困り事と大きく一括りにされると、どこまで頼んでいいのか遠慮もあったんだと思います。それで何ができるかを明確にしました。

でも、まだまだ皆さんの要望になかなかお応えできていないのが現状ですかね。

ただその反面、予想外の方向でいい変化も起きているんですよ。例えば「話し相手がほしい」というようなお悩みは、月に二回ある健康教室にお誘いすることによって親しい友人ができて解消され、他に困りごとがあってもお互いに解決するっていう流れが自然とできたんですよ。この人は信頼できるんだなという信頼関係が必要なんだなと。今は健康教室をメインに活動して、困りごとがあるときにお互いに助け合える個人と個人のつながりを作る意味合いでの個人支援にシフトしています。とはいえ、それだけでは賄えない部分はあり、きちんとそこもフォローしていきたいのですが、それは今後の課題ですね。

湊地区では、最近は湊町二丁目復興公営住宅入居予定者と周辺住民さんを対象に市の地域づくりコーディネート事業ということも担っています。

主には落語会や音楽交流会、講演会などを通じた交流支援と互助の意識醸成を行っているのですが、この事業の目的は、住民さん自ら地域課題が何かを考え交流スペース（オンザコーナー）を作って何ができるかを話し合い、実行に移すことにあります。

具体的な活動としてはワークショップ形式で広報をどう行うか、チラシをどう作るか、当日は誰が何をやるかなど基本的には自分達で考えてもらい企画からイベント運営までやってもらおうと思っています。もちろん最初からすべて住民さんにやってもらうのではなく、我々がサポートしながらですが。そのはじめの第一歩として、近いところで企画していたのは、湊地区の住民さんに集まっていただき講師の方や実際に現場で活動されている方をお招きし、ボランティアに行く時に気をつけていることなど講演をしてもらったりしています。それを受けて、自分たちで交流スペースを使ってやりたいことを考えてもらうというものなんですが、参加者の年齢層がどうしてもふまねっと教室に参加された方にお声がけをしているのでご年配の方が中心で、若手は少ないので、もっと若手の方が増えていくとよりいいですね。三月末までで一つイベントを行い、四月以降も順次実施予定です。

例えばそれがお茶っこ会、カラオケでもふまねっと教室でもいいんですが自分たちで企画から、チラシ作り、配布、当日のイベント運営もやるということが大きなポイントなんですよね。そうすると、なんとなく参加しているのではなくて意味も熱量も変わってくると思うんです。

代表・渡邊さん）　私が個人的に思いついた企画は湊地区の地図を持ってきて、昔の写真と今の写真を照らし合わせてみるのも面白いかなと思ってました。昔を知っている人は懐かしい気持ちで地域に対する愛着を再確認できるし、今の湊地区しか知らない人は昔はこうだったんだって地域の歴史を知れるとともに、興味をもつことで地域への愛着が生まれるきっかけになるかなと思って。これは一例ですけど介

NPO法人 ぱんぷきんふれあい会

代表理事　渡邊智仁

地域と共に、地域に住まう方々の利便性を追求し住み続けられる環境を整備する。

護や健康教室のような体育会系だけでなく、歴史や写真など文系の活動もやっていけたらなと思っています。

そして、何であれ交流するにあたって交流場所の有無というのが重要になってきますよね。やはり教室に来られる多くの方から集まる場所がなかったり、そういう場所があっても開いていなかったり、いつ使えるかわからず結局使いづらいなど聞きます。さきほどから話に出ているオンザコーナーという交流スペースがその中心になっていけたらとも考えています。

現在は認知症予防の教室を開いたり、イベントの時やふまねっと教室の時のみ開けているんですが、今後例えば週一回くらいから曜日を決めて気が向いたらふらっと立ち寄れる自由なお茶っこスペースとしても開放したいと考えていて、最終的には毎日開けるようにしたいんですよね。

我々NPO法人としての湊地区での活動は、自分たちで地域のために何かをしたいと思う方が活動しやすい場所を提供できればと考えているんですが、オンザコーナーがぱんぷきんが運営する交流スペースではなく、地域住民自らが自分たちのために使いたい集まりたいと思える場所になるのが最終的なイメージなんですよ。それに向けて今後の展開としては、地域の方々がイベントで使いたいという時はできるだけ場所の提供をしたいと思っていますし、後々は何かやりたいことがあるという地域の人たちが、場所を自由に使え、そこでなら実現できる、そういうスペースとしてオンザコーナーの運営までも地域住民の方々に行ってもらえたらいいなと。ただ、不思議となんでもできそうなイメージになると利用者側が何をしていいのか分からなくなってしまうので、選択肢としてふまねっと運動などはいつでも提供できるようにしておきたいですね。交流と健康づくりが高齢者には優先順位の高いキーコンテンツであり、ニーズもあるので。その他にも、湊地区は外出するための手段が足りないので外に出ようと意識のある方に対して出やすいようにタクシーを使った外出支援・生活の利便性を向上させるためのサービス開発というアプローチも行っていこうと思っています。

でも、結局色々と環境は整えられても湊地区に限らず共通して「人づくり」という地域づくりの大きな問題があってそれを解決しなければ次の展開が難しいと考えています。

それは、住民主体の活動が自然発生的にできるような支援をしてくださいと依頼されてはいるんですが、実はそれって住民活動を行う活動者とそれらを引っ張るファシリテーター的なリーダーは別物だと最近特に思うんですよね。一概には言えないんですが、今この始まって間もない短期間で活動者でもあり、リーダーになれる人を探して、一気にお任せしてもうまくわまらないと思うんですよ。もちろん、将来的には活動者がリーダーになっていくのは好ましいですし、できないとは言いませんが今の段階ではまだ難しいと感じています。そうするとそれ相応の期間を設けて、まずは住民主体の活動を担う活動者として地域で育成していくことからはじめて、ここからさらにリードする人を育てていくという流れが必要です。

我々も住民さんのエンパワーメントをこの半年間行ってきましたが、結果的にそこまではできなかったんです。だから将来的にエンパワーメントする為には何をどうのようにしていけば、地域をリードする人が生まれるのか、ということが課題ですね。また、ボランタリーな活動をボランティア団体だけが無償の活動としてやるよりは、ついでにできるような、元々何かを行っている人たちに付け加えていくイメージも必要なんじゃないかなとも思います。それはもしかしたら、介護事業者が地域貢献の為に+αのやれる活動としてやるべきことなのか、それとも、地元の商工業者と一緒になって人やサービスのつながりで支え合う形を考えるとか。

そこは多様な主体があっていいと思うんです。リードする人たちは必ずしも住民でなくても良いんじゃないかなと。誰にそういうところをやってもらうのかを考えていくことが重要ですね。もちろん我々はそこを当事者としてやっていくんだという思いはありますが、我々だけでは実現できないことですし同じビジョンを持って組織、団体として動く方々をどれだけ増やせるかが鍵なので。組織としては営利法人であっても小売業者であっても、我々が活動を通じて参画者をどれだけ増やせるのか、そこからはじめて次の発展が生まれるんだと思います。

あと、大切なのは関わる方が自分のやれる範囲で意識せずとも地域と付き合えるくらいの感覚でないとダメだと思っています。活動者のほとんどもいろんな役割を抱えていて、いろいろな思いはあると思うんですよね。活動の必要性は分かってはいるんですが、リーダーとして責任を押し付けると離れていってしまうのが現実ですね。だから、参加してくれている方に、こういった活動いいよね、居て楽しい、やって楽しい、そして自分の為になっている。それが回り回って結果的に地域をリードしていた、そんな感覚でハードルを低く設定しないとうまくいかないと思います。

地域を引っ張っていって下さいよ―リーダーなんだからっていうのはつぶれちゃうし、そもそも意識高くやれる方は今の段階ではそれほど多くはないと思います。でも、それがいいとか悪いではなくて、各々のモチベーションに関係なく身軽に、どれだけ参加してもらえるか。

菅野さん）近所のお節介おばちゃんくらいの気持ちだと来るんですね。だけど、急にボランティアリーダーやりませんか？って言った瞬間に、「私歳だし…」って急に引いちゃうんですよ（笑）でも、そんな経験から元来いるお節介おばちゃんがたくさんいればいいんだと感じましたね。

渡邊さんその他、ゆくゆく出てくる課題としては、組織マネージメントの一面からすると七十代の活動者などの同一世代だけで固めてしまうと今の活動者は数年後に一気に卒業してしまいます。だから、今後は多世代ミックスをしていかなければいけませんがコミュニティも最初からミックスするのは難しいので、将来的にそうなっていくためにまずはくつけやすい世代からミックスしていくのはどうかなと思っています。たとえば子育て世代と高齢者、働くお母さん方がちょっと子供を見ていてほしいなど孫子守りのような関係性で、子育て支援につながりますし。四十、五十代の子育て世代と高齢者とどうくつけるかは今考えていますね。

菅野さん）ぜひとも子育て世代にどんどん出てきてほしいですよね。

渡邊さん最終的には地域に住まう方々の利便性を上げて住みやすい街を作ることが我々の目標です。その手法が掃除、洗濯のような行政でいう生活支援かもしれないし、それ以外の分野に入っていくことも可能性としてあります。いずれにしても、活動を通じて見えてきた地域課題をひとつひとつ解決しながら、この地域に住み続けられる環境整備をする、その実現へ向けて邁進していきたいです。